Kiryu Junior College

成人看護学実習における中間評価と達成動機との関連（その2）

Relationship of Achievement Motivation to Midway Evaluations in Adult Nursing Practical Training （Part2）

鈴木　はるみ，澁谷　貞子

要　約

本研究の目的は，成人看護学実習における中間評価と達成動機との関連要因を明らかにすることである．対象は，本学看護学科3年生で成人看護学実習終了78名に，自記式質問紙調査票にてアンケートによる調査を実施した．その結果，中間評価により，実習の結果に対して自己の努力不足などの原因と今後の方向性を考え，主体的に学習ができた学生は，自らの目標達成そのものをめざす行動を引き起こす動機を高めることができた．また，ソーシャルサポートの影響を考慮すれば，実習中の学生は，他者との交流や家族との関係，友人との関係により，複雑な実習環境の中でも，親しい友人に感情を発散し，自己の世界に籠もることなく，他者との交流や家族からのサポートの影響により，目標達成に向かっていけるのではないかと示唆された．

キーワード：達成動機，中間評価，成人看護学実習

はじめに

看護教育における臨床実習では，学生は患者，家族，医療従事者などが取り巻く臨床の場に身をおき学習を展開していくという，学内の授業とは異なる学習方法をとっている．

本学の成人看護学実習では，学生が達成可能な目標を見いだすために，自らの評価によって成否を判断するために中間評価を実施している．尚かつ，学生自身が，実習期間中に自己評価し現実的に達成することが可能な課題を明確にすることを求めている．筆者ら[1]の研究の結果，中間評価に満足感が得られた学生は，達成動機が高く，目標達成のための行動を引き起こす傾向がみられた．

実習中に主体的に学習に取り組むためには，物事の結果に対して自己の努力不足などの原因を考える志向を持つことが必要である[2]．また，堀野[3]は，達成には結果のみでなく始発や過程を重視することが必要であると述べている．そこで，看護学実習において，学生自らの目標の達成そのものをめざす行動を，引き起こす動機を高める必要があるのではないかと考える．

看護学実習の評価は，学生の自己評価を取り入れながらも教員の形成的評価が中心となり[4]，学生が，自己評価の結果をどのように解釈し，受け入れるかは，その後の学習意欲に影響するため，到達しうる現実的な目標を評価基準として提示する必要がある[5]．従来の実習評価に関する研究において，自己評価や他者評価に関する研究はみられるが，中間評価の研究報告は少ない[1]．また，達成動機に関しては，心理学教育における研究[6) 7) 8) 9) 10)]は数多くなされているが，看護学においては数少ない[1) 11)]．そこで，本研究では，今年度も学生自身が目標の達成そのものをめざす行動を引き起こす動機，つまり達成動機[3) 12) 13)]と中間評価との関連要因の検討を行った．

研究目的

成人看護学実習における中間評価と達成動機との関連要因を明らかにし，実習の自己評価の一助とする．

用語の操作的定義

1．達成動機[3) 12)]

達成動機とは，「ものごとを最後までやり遂げたい，困難なことにも挑戦し，成功させ，自分自身にとって価値のあることを成し遂げようとする動機のこと，自らの達成目標の達成そのものをめざす行動を引き起こす動機のこと」である．

NII-Electronic Library Service

Kiryu Junior College

2．中間評価

中間評価とは，「成人看護学実習Ⅰ（回復期・慢性期・リハビリテーション期・終末期）4単位（4週間），成人看護学実習Ⅱ（急性期・周手術期）4単位（4週間）において，2週目の最終実習日の評価を成人看護学実習評価に基づいて，自己評価を中間評価」とする．その際，実施していない項目については評価する必要はないと提示している．

研究方法

1．調査対象

2005年4月18日～7月15日に，成人看護学実習が終了した看護短期大学3年生78名

2．調査期間

2005年7月21日に，自記式質問紙調査票を配付．記入後に質問紙を回収した．

3．調査内容

成人看護学実習についての中間評価と達成動機との関連を明らかにするため，基本属性・達成動機を調査項目とした．

1）基本属性

（1）調査対象

同居・家族との関係・信頼できる友人の有無・趣味・他者との交流・親しい友人の数

（2）中間評価について

主体的な学習・満足感・必要性・学習内容の把握・目標の明確化

2）達成動機

堀野[3) 12)]によって，「ものごとを最後までやり遂げたい」「困難なことも挑戦し，成功させたい」という達成動機を，社会的，個人的の両面にわたってとらえようと作成されたのが達成動機測定尺度である．これらの2つの側面から，成人看護学実習において，自らの達成目標の達成そのものをめざす行動を引き起こす動機について把握するためにこの尺度を使用した．この達成動機測定尺度は，「自己充実的達成動機」に関する項目が13項目と「競争的達成動機」に関する項目が10項目の2つの下位尺度をもつ23項目の尺度で7件法により測定する尺度である．達成動機測定尺度のα係数は，0.87～0.91である．因子分析の結果，提出した概念通りの2因子が見いだされたことは内容的妥当性を示している．

4．分析方法

母集団を把握するために，調査対象の属性について集計を行い，達成動機尺度の得点の平均値と標準偏差を算出した．統計的手法として，t検定・一元配置分散分析・多重比較を算出した．データ分析はEXCEL2000に入力し，JAMP IN4.0を用いた．有意水準は，5％未満とした．

5．倫理的配慮

この調査は，成人看護学実習への評価方法について，達成動機に関することや，中間評価点や最終評価点から検討し，純粋に教育研究の検討を目的に行うものであること．また，記入の有無によって成績に影響すること及び個人的に不利になることは絶対にないこと，この調査の依頼を拒否・中断する権利があり，研究としてまとめ公表する際には個人が特定できないようプライバシーの保護・秘密は厳守する旨を調査用紙の表紙に文書で明記し，尚かつ口頭でも説明し同意の得られた学生である．

結　果

成人看護学実習終了学生78名を対象とし，自記式質問紙調査票を配付した結果，回答が得られた76名中，有効回答は71名（回収率96％）であった．

1．基本属性

対象の基本属性は表1に示した通りである．家族との同居は，「別居」43名（58％），「同居」32名（42％）であった．信頼できる友人については，信頼できる「友人がいる」56名（75％），「少しいる」12名（17％），「どちらともいえない」2名（2％），「たくさんいる」3名（4％），「いない」2名（2％）であった．親しい友人の数は，「4人以上」52名（71％），「3人」11名（15％），「2人」8名（11％），「1人」1名（1％），「いない」2名（2％）であった．他者との交流では，「どちらともいえない」41名（55％），「積極的」23名（30％），「消極的」11名（15％）であった．

2．中間評価

中間評価は，成人看護学実習Ⅰ（回復期・慢性期・リハビリテーション期・終末期），成人看護学実習Ⅱ（急性期・周手術期）において，2週目の最終実習日の評価を成人看護学実習評価表に基づいて，自己評価した．そして，その中間評価についての自記式質問紙調査票の結果は，表2に示す通りである．中間評価に対する満足感については，「どちらともいえない」58名（78％），満足感が「得られた」11名（14％），「得られなかった」11名（14％）であった．中間評価の必要性には，「必要である」53名（71％），「どちらともいえない」21名（28％），「必要でない」1名（1％）であった．中間評価によって学習内容が把握できたかについ

NII-Electronic Library Service

Kiryu Junior College

表1　基本属性　N=71

項目	カテゴリー	人数(%)
家族との同居	同居	32(42)
	別居	43(58)
家族との関係	良い	66(88)
	どちらともいえない	9(12)
	悪い	0
信頼できる友人	いる	56(75)
	少しいる	12(17)
	どちらともいえない	2(2)
	たくさんいる	3(4)
	いない	2(2)
親しい友人数	1人	1(1)
	2人	8(11)
	3人	11(15)
	4人以上	52(71)
	無	2(2)
他者との交流	積極的	23(30)
	どちらともいえない	41(55)
	消極的	11(15)

表2　中間評価　N=71

項目	カテゴリー	人数(%)
主体的な学習	できた	37(52)
	どちらともいえない	34(48)
	できなかった	0
満足感	得られた	6(8)
	どちらともいえない	58(78)
	得られない	11(14)
必要性	ある	53(71)
	どちらともいえない	21(28)
	ない	1(1)
学習内容の把握	できた	49(66)
	どちらともいえない	23(30)
	できなかった	3(4)
課題・目標の明確化	できた	52(71)
	どちらともいえない	20(27)
	できなかった	2(2)

ては，「把握できた」49名（66%），「どちらともいえない」23名（30%），「把握できない」3名（4%）であった．中間評価によって目標が明確にされたかについては，「明確にできた」52名（71%），「どちらともいえない」20名（27%），「明確にできなかった」2名（2%）であった．

3．達成動機に関連する要因

対象者の達成動機を測定するために達成動機尺度を用いた．クロンバックのα係数は0.85で，達成動機尺度（以下達成動機と示す）の得点と下位尺度の得点は，表3に示した．

他者との交流と達成動機との間には，有意な差が認められた（p=0.003）（図1）．さらに，Tukey法による多重比較で差を検討したところ，達成動機では，他者との交流に積極的な者は，消極的な者より達成動機が高かった（p<0.05）．また，他者との交流と競争的達成動機との間には，有意な差が認められた（p=0.026）．さらに，Tukey法による多重比較で差を検討したところ，競争的達成動機では，他者との交流に積極的な者は，消極的な者より達成動機が高かった（p<0.05）．そして，他者との交流と自己充実的達成動機との間には，有意な差が認められた（p=0.008）．さらに，Tukey法による多重比較で差を検討したところ，自己充実的達成動機では，他者との交流に積極的な者は，消極的な者より達成動機が高かった（p<0.05）．

表3　達成動機尺度の平均点，標準偏差　N=71

	Mean±SD	α係数
達成動機	118.53±15.67	0.85
自己充実的達成動機	77.01±10.98	
競争的達成動機	41.52±7.25	

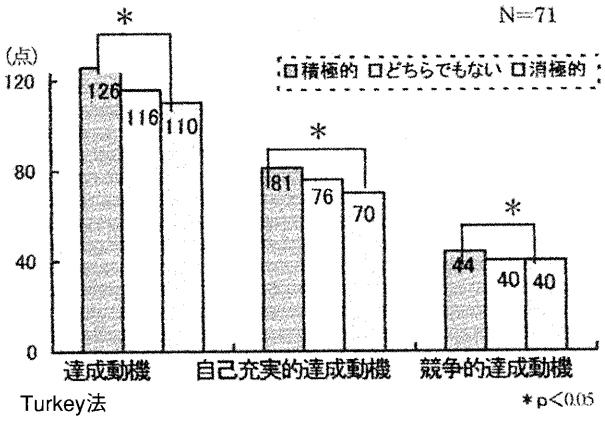

図1　中間評価における他者との交流と達成動機との関連

4．中間評価に関連する要因

中間評価と達成動機との関連を明らかにするために，中間評価によって主体的な学習ができたか，できなかったか検討を行った．その結果，主体的な学習と達成動機との間には，有意な差が認められた（p=0.005）．さらに，Tukey法による多重比較で差を検討したとこ

NII-Electronic Library Service

Kiryu Junior College

ろ，達成動機では，中間評価により「主体的な学習ができた」は，「どちらともいえない」より達成動機が高かった（$p<0.05$）．また，主体的な学習と競争的達成動機との間には，有意な差が認められた（$p=0.006$）．さらに，Tukey法による多重比較で差を検討したところ，競争的達成動機では，中間評価により「主体的な学習ができた」は，「どちらでもない」より競争的達成動機が高かった（$p<0.05$）．そして，主体的な学習と自己充実的達成動機との間には，有意な差が認められた（$p=0.043$）．さらに，Tukey法による多重比較で差を検討したところ，自己充実的達成動機では，中間評価により「主体的な学習ができた」は，「どちらでもない」より自己充実的達成動機が高かった（$p<0.05$）．

中間評価に対する満足感においては，「どちらともいえない」方が高い傾向がみられるが，有意な差は認められなかった．中間評価に対する必要性においては，「必要でない」は，達成動機，自己充実的達成動機，競争的達成動機が高い傾向がみられたが，有意な差は認められなかった．課題の明確においては「明確にできない」は，達成動機，自己充実的達成動機，競争的達成動機が高い傾向がみられたが，有意な差は認められなかった（表4）．

表4　中間評価と達成　動機との関連　　N=71

主体的な学習	できた	どちらともいえない	できない	有意確率
	n=37	n=38	n=0	
	Mean±SD	Mean±SD	Mean±SD	
達成動機	123.40±2.48	114.42±2.45		0.005
自己充実的達成動機	79.59±1.79	74.97±1.76		0.043
競争的達成動機	43.81±1.16	39.44±1.15		0.006
満足感	**得られた**	**どちらともいえない**	**得られない**	**有意確率**
	n=6	n=58	n=11	
達成動機	116.83±6.45	119.65±2.07	115.72±1.84	0.714
自己充実的達成動機	76.00±4.55	77.89±1.46	74.54±3.36	0.633
競争的達成動機	40.83±3.05	41.75±0.98	41.18±2.25	0.940
中間評価の必要性	**必要**	**どちらともいえない**	**必要でない**	**有意確率**
	n=53	n=21	n=1	
達成動機	120.01±2.10	114.57±3.34	123.00±15.33	0.375
自己充実的達成動機	78.49±1.49	73.52±2.37	72.00±10.85	0.194
競争的達成動機	41.52±0.99	41.04±1.58	51.00±7.26	0.412
課題の明確	**できた**	**どちらともいえない**	**できない**	**有意確率**
	n=52	n=20	n=2	
達成動機	117.78±2.14	118.75±3.46	126.50±10.90	0.720
自己充実的達成動機	77.11±1.53	76.15±2.48	77.00±7.85	0.946
競争的達成動機	40.67±1.00	42.60±1.61	49.50±5.10	0.169

一元配置分散分析

考　察

成人看護学実習は，多様な現象がみられる医療現場で行われ，学生は教員や他の学生だけでなく，患者や家族，医療従事者との複雑な相互作用を行うことを要求される．このような複雑な状況での実習という教育評価は，講義，演習と同様に学生の評価を取り入れ，指導に関わる人々にフィードバックし実習における授業過程の改善が必要である．

本研究では，中間評価により主体的に学習ができた者は，達成動機・競争的達成動機・自己充実的達成動機が有意に高い結果が得られた．高柳[4]は，実習に対して主体的に取り組むために必要な姿勢について調査した結果，臨地実習で主体的に学習に取り組むには，内的統制志向を持つことが重要であり，学習活動へ意欲的に向かわせると報告している．そして，学生自身の内的要因に帰する傾向は次の学習活動へ意欲的に向かわせると述べている．

本学の成人看護学実習では，自己評価を実習期間の中間に，学生が達成可能な目標を見いだすために，自らの評価によって成否を判断するために中間評価を実施している．自己評価とは，評価主体者が自分自身を評価対象とする場合を指し，主体者が自分の学業，行動，性格，態度などを評価し，得られた結果を自分でよく吟味・確認し，そして，その後の学習や行動の改善に役立てるといった一連の行動であると定義されている[5]．つまり，自己評価は，単に自分自身の学業，行動などを評価し，結果を得るにはとどまらない活動であり，得られた結果をよく吟味・確認し，その後の学習や行動の改善に役立てるというフィードバックの機能が働いて初めて自己評価活動は成立すると考えることができる．ゆえに，実習中に主体的に学習に取り組むためには，実習の結果に対して自己の努力不足などの原因と今後の方向性を考えること．そして，主体的に学習ができた学生は，自らの目標達成そのものをめざす行動を引き起こす動機を高められ，中間評価が主体的学習を推進しているのではないかと推察できる．

舟島[5]は，自己評価は他者評価に比較すると，自発的・自律的に行われ，効果が高いが，効果的な自己評価に向けては，その目的や対象について明確に理解する必要があると述べている．つまり，実習期間中にフィードバックしながら，実習目的を明確にし，目標達成するために今後の目標・課題を明確にしていくことも必要であるといえる．

達成動機とは，非常に複雑であり，様々な面においても両極性をもっている．また，達成動機の概念の構築には，結果のみでなく始発や過程を重視することが必要である．そして，学習する理由の一つとして考えられる達成動機づけは，競争的意味合いを含むもので

NII-Electronic Library Service

Kiryu Junior College

あり，この動機は他者との比較において成功を勝ち取りたいとする基本的要求であるといわれている[6]．本研究では，属性と達成動機との関連において，他者との交流に積極的な者は達成動機・競争的達成動機・自己充実的達成動機が有意に高い結果が得られた．筆者ら[1]の研究においては，親しい友人がいる者や他者との交流に積極的な者は，達成動機が高く，本研究でも類似の結果が得られた．堀野[12]の調査では，ソーシャルサポート（友人・先生・家族など）の多い人は，達成動機が高いと報告している．本研究では，他者を定義付けしなかったので，堀野と比較することは困難であるが，他者との交流に積極的な者の達成動機が高く，堀野の結果と符合している．

本学の成人看護学実習において，看護過程の展開では，患者の看護問題を抽出・解決していくが，その過程で患者と看護師の関係は重要であり，人間関係の形成は問題解決過程の1つの基盤となる．しかし，臨床の場の学生にとって，学内環境とは異なり精神的平衡を保つことが難しい状況にあり，患者との人間関係を形成する上で学生の心理状態は困難な状況にある[13]．そのために，ソーシャルサポートの影響を考慮すれば，実習中の学生は，他者との交流や家族との関係，友人との関係により，複雑な実習環境の中でも，親しい友人に感情を発散し，自己の世界に籠もることなく，他者との交流や家族からのサポートの影響により，目標達成に向かっていけるのではないか，そして，中間評価にサポート状況を考慮することにより自らの目標達成を目指すことが可能なのではないかと示唆された．

以上の知見より，中間評価により，実習の結果に対して自己の努力不足などの原因と今後の方向性を考え，主体的に学習ができた学生は，自らの目標達成そのものをめざす行動を引き起こす動機を高めることができるのではないかと示唆された．

結　論

成人看護学実習における中間評価と達成動機との関連要因について検討を行った結果，中間評価により，実習の結果に対して自己の努力不足などの原因と今後の方向性を考え，主体的に学習ができた学生は，自らの目標達成そのものをめざす行動を引き起こす動機を高めることができた．また，ソーシャルサポートの影響を考慮すれば，実習中の学生は，他者との交流や家族との関係，友人との関係により，複雑な実習環境の中でも，親しい友人に感情を発散し，自己の世界に籠もることなく，他者との交流や家族からのサポートの影響により，目標達成に向かっていけるのではないかと示唆された．

引用文献

1）鈴木はるみ・澁谷貞子：成人看護学実習における中間評価と達成動機との関連．桐生短期大学紀要，15：31-36，2004．

2）高柳美香ら：内的統制志向と臨地実習での主体的取り組みの関連．看護教育，33：9-11，2000．

3）堀野緑：達成動機の構成因子の分析－達成動機の概念の再検討－．教育心理学研究，35：148-154，1987．

4）内海知子ら：成人看護学実習指導に対する学生評価．看護教育，33：144-146，2002．

5）舟島なをみ・定廣和香子：看護学教育における自己評価の意義と課題．看護展望，28（5）：17-22，2003．

6）土井聖陽：達成動機の二次元説－親和的達成動機と非親和的達成動機．心理学研究，52：344-350，1982．

7）Dweck,, C.. S.: Motivational processes affecting learing. American Psycholigist, 41: 1040-1048, 1986.

8）久田満・丹羽郁夫：大学生のストレスに関する研究（2）．社会心理学会・グループダイナミックス学会大会論文集，173-174，1986．

9）Miyamoto, M.: Instrumental activity in achievement motivation. Japanese Psychological Research, 23: 79-87, 1981.

10）Sadd, S., & Lanauer, M., : Objective measurement of fear of success and fear failure. A factor analytic approach, J. of Consulting and Clinical Psychology, 46: 405-416, 1978.

11）森田敏子ら：今，看護に必要な力　自己教育力　達成動機と自己教育力．Quality Nursing, 10（3）：278-282，2004．

12）堀野緑：勢力動機の二面性とソーシャルサポートの関係．教育心理学研究，39（4）：419-425，1991．

13）堀野緑・森和代：抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因．教育心理学研究，39：308-315，1991．

NII-Electronic Library Service

Kiryu Junior College

Relationship of Achievement Motivation to Midway Evaluations in Adult Nursing Practical Training （Part2）

Harumi Suzuki, Teiko Shibuya

Abstract

The objective of this study was to clarify factors in the relationship of achievement motivation and the results of midway evaluations of practical training by adult nursing students. The subjects of the study were 78 third-year nursing students at this school who completed adult nursing practical training. They were given a questionnaire to fill out themselves. The results showed that students who were satisfied at their midway evaluations were highly achievement-motivated and that the students need the ability to judge the validity of their own self-evaluations. The results further suggest that students should also be able to determine what objectives they can practically achieve. The results also suggested that students who pursue some kind of activity out of personal interest, maintain active contacts with others, have two close friends or have good family relationships are highly motivated, while students not having strong personal networks require extra advice and guidance.

Keywords: Practical training for adult nursing, Achievement motivation

NII-Electronic Library Service